

我が師・大平正芳に思う

加藤 紘一

大平正芳さんの姿を、初めて実際に見たのは、まだ私が外務省の中国課で課長補佐をしていた時であった。多分、日中関係か何かのパーティーの席だったと思う。政治家や役人、経済界の方々が大勢集まった会場の中で、一人ボツンといった感じで立っていた大平さんの姿が、私の目を射たような気がした。

当時の私の仕事は、中国問題についての政策立案の一端を担うことだったので、各政党、特に自民党のリーダーの中国問題に関する考え方を整理し、ファイルするようなことも担当していた。大平さんの考え方は、当時のリーダーの中では最も読みが深く、透徹していて、偉い人だなあと常々思っていた。その大平さんが、何となくそばに行つて、話しかけてもいいんじゃないかと感じさせる雰囲気、私の視線の中に立っていた。いかにも人間の幅と吸引力がありそうで、東北出の私にすれば、「こういつた牧歌的な政治家がいいなあ」と思わせるに十分な雰囲気を感じていた。

大平派入りした経緯

その後、政界への出馬を決意した時も、私は迷うことなく大平派入りを決意した。私の父親は藤山派だったのだが、当時の藤山派はすでに店仕舞いに向かっていた。仲人は灘尾弘吉さんだったが、灘尾さんとは何となく政治的路線が違つような気がしていた。大平さんには最初の出会いから親近感を持っていたし、池田勇人以来の宏池会の政策は近代合理主義に基づいていて私の感覚に合うとも思っていたので、他の議

員とは違つてまさに「飛び入り」での大平派入りを考えた。

その方法はこうだ。まず、大平さんと遠い親戚にあたるといわれる外務省の法眼晋作さんに、大平さんへの紹介を頼んだ。法眼さんの長男の俊作君と私は高校・大学の同級生。俊作君は昭和三十九年に早逝してしまつたが、その葬儀の時に父晋作氏の友人代表で弔辞を読んだのが大平さん、俊作君の友人代表が私という縁もあつた。そんな縁で、法眼さんに紹介状をお願いしたのである。

初めて宏池会の会長室を訪ねた時、大平さんは黙つてずっと話しを聞いてくれ、最後に「君、体は大丈夫かね」「資金の準備はあるのかね」とだけ言つた。私は、「体は大丈夫です。資金の準備はありませんが、ぎりぎりの費用でやってみます」と答えたことを覚えている。だが、大平派からの出馬に関しては何も言わない。二月経つても何の連絡もないので、人を介して田中六助大蔵政務次官に会つて相談したところ、再び大平さんから呼び出しがあり、「どうも決心は変わらないようだな。どうしてもやるんだな」と言われた。「決心は変わりません」と答えると、大平さんは「じゃ、一緒に苦労するか」と笑つて言つてくれたのが、大平派入りの経緯である。昭和四十六年のことだ。翌四十七年十二月の総選挙に初出馬。大平派の同期生には宮崎茂一、今井勇、萩原勇、住栄作、瓦力の諸氏がいた。いわば大平一期生の面々である。人間大平の魅力を一言で言えと言われれば、やはり人間に対する包容力というか、懐の深さではないかと思う。必ずしもエリート・コース一直線で大蔵省に入った人でなく、キリスト教の伝道士をしたり、商売をしたりした後に大学に入り直したような人だから、人間を単に表づらただけでは決して見ない。それぞれの人の生き様を、自分の体験と照らしながら考えるようなところがあつて、人を見る目が非常に温かかつた。「人間には必ずいいところもあれば欠点もある。正直なところもあればずるいところもある。その人間がぶつかりあつて社会を作っているから、人間社会は面白いんだ」と、よく言つていたことが思い出される。

総裁公選と四〇日抗争の思い出

福田赳夫氏と公選で総裁を争った時のことだ。私たち大平派の議員は全員が地元張り付いて選挙運動に直進した。県内で一票でも勝った方が県の持ち票を全部取れるシステムだったから、私たち新米議員も必死に頑張らざるを得ない。しかし、約四〇日の選挙期間中には、時に東京に出かけたくなる日もある。

そんなある夜、瓦さんと大平さんの自宅を訪ねると、大平さんは「やあ、ご苦労さん。毎日働いてくれてるかい」と労ってくれた後で、やにわにその日会ってきた冒険家の植村直巳さんの話を始めたのだった。

「植村君が面白いことを言っていたよ。犬ぞりで北極を旅していると、一〇匹前後の犬の性格が日に日に分かってくる。ある犬は、一生懸命引つ張っているように見えて、実はひとつも引つ張っていない。またある犬は、何もやっていないように見えながら、物凄く力強くそりを引つ張るんだ。植村君はそう言うんだね」と。瓦さんと私が即座に辞去して、選挙区に飛んで帰ったことはいうまでもない。大平さんは、人間に対する洞察力、人使いに非常に優れた人だった。

ねばり強さも相当なものだった。日中航空協定交渉の時などは、北京で血尿が出るまで頑張った。さらに帰国した後も、休む間もなく自民党の外交委員会に連日呼び出され、延々と続く議論に耐えていた。当時の自民党には中国問題となると、党が真っ二つになるような思想論争をする雰囲気が残っていた。大平さんは反対派に吊し上げを食らうような目に会いながら、しかし微動だにせず党内をまとめ上げた。連絡係を務めていた私は、大平さんの土性骨に強く感動を覚えた。

福田氏と「四〇日抗争」を闘っていた時のことも忘れられない。当時、私は官房副長官であったが、大平さんは日本の全マスコミを相手にしながら総理の座を退こうとしなかった。「俺はやめたら気が楽になるし、そうしたい。しかし、誰を後任の総理にするんだ。誰が党をまとめられるか。そこを考えると、俺

には辞める自由はない。無責任なことはできないんだ」と言い続けていた。

数日たって、大平さんは党本部で福田氏と激論をして、あの有名な「俺に辞めると言うのは死ねということか」という名ゼリフを吐いて、官邸に帰ってきた。その後、遅い昼食を一緒にしていると、突然、「加藤君、福田さんは俺に辞めると言った。しかし、重ねて言うが、次に誰を総理にしたらいいと思う」と、ランランと目を輝かせて聞いてきた。もちろん、当選二回の私に答えられるわけもない。シツと下を向いていると、「加藤君、言ってみろ」と繰り返す。また黙って下を見ていると、大平さんは暫くして、「俺が総理を辞めたら、日本のために総理にすべきは福田さんだろう」と呟いたのだ。

私は耳を疑った。たった今まで大喧嘩してきて、どうしてそんな言葉がでるんだろう。これを聞いたら、派閥のメンバーはどう思うだろう。そんなことが思い浮かんだが、やはり総理大臣になるような人は、肝心な時には恩讐も何も超えて、国のことだけを真剣に考えているのだろうと思いついた。あの時のランランと輝いていた大平さんの目を、私は忘れることができない。

大平さんの真骨頂は外交にあった

大平さんの真骨頂はやはり外交にあったと思う。戦後の外務大臣としては最も在任期間が長い大臣だが、長さ以上にその内容が素晴らしかった。日中関係の正常化は田中さんが総理の時の業績だが、その前後五、六年の外交は全部自分が取り仕切ってきたとの自負が大平さんにはあったはずだ。また大平さんは、歴史の流れの中で無難に外交をこなしたというよりも、自ら外交をデザインし積極的に動かしていった点で評価されるべきである。日中国交正常化交渉、それに引き続く日中航空協定交渉などは、大平さんが当初からデザインし、考え続けて実行した最大の功績であったと思う。

大平内閣の時代には、私は第一次の官房副長官をやり、第二次でも官房副長官をやったから、大平総理

の外遊には全て同行した。昭和五十四年の訪米の際には、カーター大統領との会談の前日、大平さんがなかなか寝つかれなくて、軽い睡眠薬を貰ったことを覚えていて、外務大臣として、そうした場面は何度も経験している大平さんだったが、やはり首相として首脳会議に臨むのは、特別の緊張だったのだろう。翌日の会談で、大平さんは年若いカーター大統領を相手に、日本の立場を堂々と主張し、積極的に渡り合った。初の会談終了直後、大平さんの内部に日本を背負って負けなかったという意識が生まれたのか、顔が紅潮してぐっと大きく見えたことを鮮やかに覚えていて、以降、カーター・大平関係は対等以上の関係だったと思うし、翌年、カーター大統領がイラン事件で失敗してからは、父親が息子を諭すように接し、「日本はアメリカの同盟国として、できる限りの援助をするから武力行使に出ないように」と伝えることもできるようになった。この時、初めて全方位外交の建て前を捨てて、西側の一員であることを大平さんが明確に出したのである。

大平さんに学んだことの一つは、「政治家の決断」ということである。前述のように、大平さんは一旦こうと決めたらテコでも動かぬ信念の人であった。政治は妥協の産物だとか、民主主義とはよく話し合っ
て歩み寄ることだと言う人もいるが、一国の進路を指導者が決断する時、そうした甘い態度は許されない。やはり指導者自身が真剣に考え、さらに真剣に考え抜いて決断しなければならぬ。そして、その決断を磨き上げ、反問し、その上でまた磨き上げ、指導者の血肉としなければ、大平さんが日中航空協定交渉の際に見せたような信念を貫く強靱さは生まれぬ。

その意味で、大平さんは思索の人でもあった。思索に思索を重ね、日本国の進路をデザインし、信念を貫いた政治家だった。

大平さんの間近に仕えた者として、「我が師・大平正芳」の業績を深く称えるとともに、数々のご指導、ご教示に心より感謝を表したい。

(衆議院議員・第一、第二次大平内閣官房副長官)